

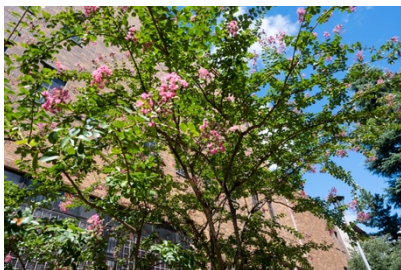
一橋大学のキャンパスで目にする植物

2023年5月—2023年8月

厳しい暑さの続く今年の夏ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？「今年の夏は本当に暑い！」の一言に尽きます。そのようなわけで、母校キャンパス内の草木も、暑さや水不足に弱いものを除いては、例年を遙かに凌ぐ勢いで成長しています。私達が作業で刈り取る草木の量も半端ではなく、暑さも手伝い、もう若くはない身体には相応に応えます。しかし、熱中症による事故もなく、無事作業をこなしていることを考えると、植樹会の作業参加者の身体は、一般的なレベルよりも健康かつ頑健なのではないかと思ふ次第です。

7月に投稿予定であった作業中に目にするキャンパスに生育する植物の紹介が、今月にずれ込んでしまいました。今回は5月から8月までの間に目にした植物について触れてみます。最初に、8月を代表する花をつける樹、サルスベリを、次にキャンパス内に庭園木として植えられているモッコクについて取り上げます。次に草本について、古くより日本人と関係の深いカラムシ、山菜としても食されるノカンゾウ、どこにでもみられるセリ科の植物ヤブジラミ、キク科の植物オニタビラコ、強靱な繁殖力を持つヘクソカズラ、最後に外来の園芸種が野生化したヒメヒオウギズイセンについて触れてみたいと思います。

1. サルスベリ



サルスベリはミソハギ科サルスベリ属の落葉広葉小高木で樹高は10メートルくらいにまでなります。公園や街路樹としてどこにでも見ることのできるこの樹は、実は中国南部原産で江戸時代に渡来し、各地に植えられたものです。従って、日本国内に自生地はありません。樹皮は淡い褐色で、薄く剥がれつつつるしています。それが樹名、サルスベリの由来であると言われています。葉は葉柄が殆どない楕円形をしていて、基本的には枝に交互につき、時には二枚ずつ交互につく

コクサギ型葉序を成すこともあります。夏の暑い時に花を咲かすサルスベリは開花期が7月から9月と大変長く、花の色が紅であることから、別名ヒャクジツコウと呼ばれています。花は、紅だけでなく、ピンクや白のものも



ありますが、花弁は6枚あり、下部は細くて長く、上部では縁は縮れて波打っています。樹形も特徴的で、幹は曲がり、定まった樹形になることはありませんが、どこで剪定しても新たに芽を出し、非常に強い木です。また、日本に自生するサルスベリの仲間にはシマサルスベリがあり、奄美諸島や沖縄で見ることができますが、台湾や中国南部にも分布し、白い花をつけます。(写真:大学構内のサルスベリ、サルスベリの花、



葉序)

2. モッコク

モッコクは常緑の広葉高木で、暖地の海岸近くに野生し、本州中部以西を原産地としています。樹高は15メートルにもなり、丈夫で長生きし、樹形も整うため、三大庭木の一つとして、モチノキやモクセイなどとともによく庭園な



どに植えられています。中央庭園内などに植えられていて、よく眼にすることができます。材は赤味が強く、樹皮から茶褐色の染料を採取して利用しました。新葉は、褐色を帯びた明るい緑色をし、葉は互生し、枝の先に放射状に集まります。葉脈は目立たず、葉柄は暗赤色なのが特徴です。花は両性花で、6月に、1年枝の基部に単生し、下向きに咲き、萼片、花弁は5枚、多数の雄蕊があります。樹齢を経るに従って風格の出

る樹姿や放任しても樹形を整えやすいことから、日本庭園には欠かせない「庭木の王」とされ、「江戸五木」の一つに数えられ、江戸時代の庭造りでは重用されました。花の香りがラン科の植物、石斛に似た木という意味で命名され、花の時期には周囲に香りが漂い、蜂などの昆虫がよく集まります。実は10月から11月頃に熟し、メジロ、キビタキ、オオルリなどの野鳥が食べます。堅く緻密な材は床柱や寄木細工、櫛等に利用され、沖縄の首里城はモッコクを建材としていることで知られています。(写真: 大学構内の花芽をつけたモッコクとモッコクの花)



3. カラムシ

苧麻。カラムシはイラクサ科ヤブマオ属の多年草です。学内の至る所で目にしますが、生育すると茎が木本化して硬くなり、丈も2メートル近くになり、私達にとっては扱いにくい植物です。本州から九州のいたるところで生育し、茎は叢生し、短い寝た毛を密生します。葉は広い卵形で先が尖り、長さ9から15センチメートルになり、縁に鈍鋸歯があります。表面には白点とまばらに毛があり、裏面は綿毛があって白く、脈上に短毛があるのが特徴です(しかし、葉裏に毛のないものもありアオカラムシとよばれています)。葉柄には短毛が密生しています。花は円錐花序で、茎の下方は雄花序、雄花は4花被片と4雄蕊があります。茎の上方から雌花序が出ます。雌花は球状に集まり、花被は筒となり短毛があります。花期は7月から9月です。



日本において現在自生しているカラムシは、有史以前から繊維用に栽培されてきたものが野生化し、帰化した植物であるといわれ、天皇が詔を発して民に栽培を奨励すべき草木の一つ(紵(カラムシ))として挙げられていたとい



うことです。中世の新潟県は日本一のカラムシの産地であり、上杉氏は衣類の原料として青苧(アオソ)座を通じて京都などに積極的に売り出し、莫大な利益を上げていたことが知られています。また、新潟県の十日町市や小千谷市などの魚沼地方では、江戸時代から織られていた伝統的な織物、越後縮はカラムシの繊維で織られていて、カラムシは江戸時代以前より盛んに栽培されていました。「カラムシ」から糸を取り出し、糸を同じ太さにする高度な技術の必要性、織に至っては伸縮性のない素材であること、他の繊維とは違い扱いが難しいことなどから、製品に至るまでの全工程を手作業で行う技術が、重要無

形文化財「小千谷縮・越後上布」として昭和30年5月12日に指定され、伝統的な製造工程が保存、継承されています。(写真: 大学構内のカラムシとカラムシの雌花)

4. ノカンゾウ

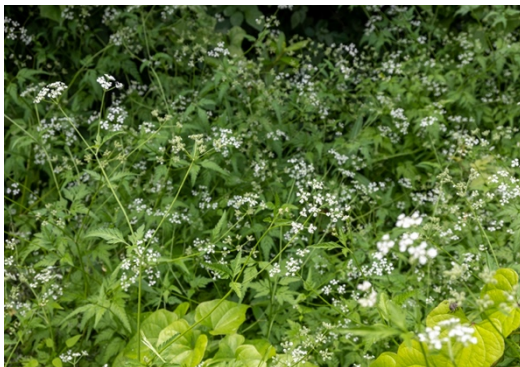


野萱草。ツルボラン科ワスレナグサ属の多年草。中国、朝鮮半島、日本、サハリンに分布し、本州から沖縄の田のあぜや溝のふちなどやや湿ったところに多く生育しています。学内では、岸田ロードの辺りでよく見かけます。同じ仲間のヤブカンゾウよりひとまわり小型で、葉は幅 1 から 1.5 センチメートルと細く、花茎は高さ 70 から 90 センチメートルになります。花は直径約 7 センチメートルで、花筒は長さ 3 から 4

センチメートルあり、ヤブカンゾウやハマカンゾウより細くて長く、ヤブカンゾウが八重になるのに対して一重であるのが特徴です。花の色は橙赤色から赤褐色まで変化が多く、花期は 7 月から 8 月です。芽をだしたてのものは、軽くゆでて食べることができ、また、つぼみは解熱作用、葉や根は利尿作用や消炎、止血薬に効果がある生薬として利用されます。さらに風邪や不眠症、むくみの軽減にも効果があると言われてしています。(写真:ノカンゾウと花)



5. ヤブジラミ



藪虱。セリ科ヤブジラミ属の二年草。やぶに生え、果実にかぎ状に曲がった刺があり、シラミのように衣類にくっつくことからこの名がつけられました。世界中に広く分布し、学内ではどこでもみることができます。葉は長さ 5 から 10 センチメートルの 2~3 回羽状複葉で、小葉は細かく切れ込み、先端の小葉が長く、葉の

両面に毛が多いのが特徴です。枝先の複散形花序に小花を多数つけます。花卉は 5 個で白色、大きさは不揃いで、外側の花卉が大きいのが特徴です。雄蕊は 5 個で葯は淡紅紫色か白色をしています。小さな花をつけるこの植物を観察してみましょう。(写真:大学構内に繁茂するヤブジラミと花)



6. オニタビラコ

鬼田平子。キク科オニタビラコ属の 1 年草ないしは越年草。日本全土の道端や公園、庭のすみなどによく生え、高さは 0.2 から 1 メートルです。以前に紹介したヤクシソウに近い植物です。ところによっては群生しますが、独立し



内で見たオニタビラコ

て生えていることの多い植物です。全体にやわらかく、細かい毛があり、茎や葉を切ると白い乳液がでます。根生葉はロゼット状につき、長さ 8 から 25 センチメートル、幅 1.7 から 6 センチメートルで、羽状に深裂します。下部の葉は根生葉に比べ、先がとがり、茎の上部の葉は少なく、小型で少し褐紫色を帯びることが多いのが特徴です。茎の先に直径 7 から 8 ミリメートルの黄色の頭花を散房状に多数つけます。花期はふつう 5 月から 10 月ですが、南の地方では 1 年中咲いているところもあります。(写真:大学構

7. ヘクソカズラ

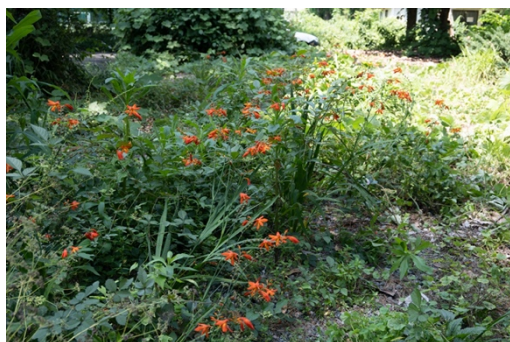


た三角形の鱗片があり、葉腋から短い集散花序をだし、白色の花をつけます。花冠は長さ約 1 センチメートルの釣鐘状で先は浅く 5 裂して、平開し、内側は紅紫色です。その名前に似合わず、小さいがきれいな花を咲かせます。葉や花は独特の臭気を出します。それが、この植物の名の由来です。繁殖力旺盛で、木本化したツルは除くのに大変ですが、駆除の難しい植物です。(写真:大学構内のヘクソカズラと花)、

屁糞葛。アカネ科ヘクソカズラ属のつる性多年草。日本全土の日当たりのよいやぶや草地、土手などにごく普通に見られます。茎は左巻きでほかの木や草などにからまって長くのび、基部は木質化します。葉は対生し、長さ 4 から 10 センチメートル、幅 1 から 7 センチメートルの楕円形または細長い卵形で、先はとがります。葉柄の基部には左右の托葉が合着した



8. ヒメヒオウギズイセン



ており、栽培が条例で禁止されています。草丈は 0.5 から 1 メートル。球茎は径 1.5 から 3 センチメートル。茎は 2 から 4 枝に枝分かかれして、湾曲することが多く、葉は根生し細長いのが特徴です。花茎から 3 から 5 個の穂状花序を出

姫緋扇水仙。アヤメ科ヒメトウショウブ属の多年草で、ヒオウギズイセンとヒメトウショウブがフランスで交配されてできた外来の園芸種です。両親は南アフリカ産ですが、耐寒性に優れ、繁殖力も旺盛、日当たりの良い荒れ地から林床のような日陰、乾燥地帯から湿地にも耐え、全世界で野生化しています。地域によっては、移入規制種の指定を受けて



し、それぞれにたくさんの花をつけます。花の色は朱赤色で、下のほうから順に咲き上がり、花びらは6枚で、内側と外側に3枚ずつあり、根元のほうでくっついています。雄薬は3本、花柱(雌しべ)が1本あり、花柱の先は3つに裂けている。花期は6から8月です。(写真:大学構内のヒメヒオウギズイセンと花)

(一橋植樹会会長 飯塚義則 昭50経)